国語科　授業づくり講座～授業研究会①～　（香美市立鏡野中学校）　令和元年６月２１日

（単元名）　１年生に鰹節の秘密を伝えよう　～目的に応じた適切な情報を得る～
（教材名）　「鰹節 - 世界に誇る伝統食」（新編　新しい国語２　東京書籍）
授業者　　松折　果恵　教諭

提案授業

本時の目標

◆知識及び技能

教材文から集めた情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うことができる。

◆思考力・判断力・表現力等

目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得ることができる。

本時の学習活動

◆「目的に応じて」読み、探究課題を決定する

①紹介する「秘密」が、１年生にどのように伝わればよいのか、期待する１年生の反応を出し合い、共有する。

②各自で、鰹節について伝えたい言葉や文を付箋に抜き出す。

③友達と協働し、１年生に伝える秘密（グループテーマ）を決める。

対話的な学びの実現に向けた工夫

◆教材文との対話

１年生に「〇〇させる（例：驚かせる、感心させる）」ことを目的（視点）として読ませ、適切な情報を選択させる。

◆友達との対話

付箋に書いた言葉や文について理由を説明させる。その際、グループで効果的な思考ツールを選択させ、情報を分類しながら話し合うことを通して、目的に応じたテーマを決定させる。

協議内容

対話的な学びが実現できていたか

◆教材文との対話

・相手意識、目的意識を持たせる工夫は十分であった。

・目安とした付箋５枚まで、書けていない生徒がいた。

→前時の「文章構成図」を基に探させるとスムースに抜き出すことができたのではないか。また、「小見出し」を付けさせておくなど、前時で「文章構成図」について、もう少し学習を深めておくとよかったのではないか。筆者の主張の捉えが弱かったのではないか。

◆友達との対話

・十分な個人思考と明確な指示がないと、対話が進まない。

・思考ツールを有効に活用できているグループとそうでないグループがあった。

→思考ツールを使う目的と、思考ツールの特徴を捉えて使用することが必要である。

見方・考え方の明示的指導の工夫（対話）

◆様々な対象と対話することを通して、思考を広げ深めていく中で、身に付けた知識・技能を定着させるとともに、多面的で深い理解につなげていくことができる。そのためにも、教師は何と対話させるのかを明確にしておく必要がある。

◆価値ある対話にしていくためには、子供に育成したい資質・能力が身に付いた授業ゴールを明確にし、そのための配慮や手立てを考えることが重要なポイントとなる。

◆子供が課題解決を図るために、何に着目すればよいのかを明示し、価値ある対話を通して授業をコントロールしていく力を身に付けなければならない。

参考：『新教育課程を活かす能力ベイスの授業づくり』ｐ74・75

講師の先生より　　松永　立志　氏　（前鎌倉女子大学教育学部准教授）

「意図」を持たせた言語活動を！

◆本単元の言語活動について

本単元は、「１年生に鰹節の秘密を伝えよう」と題し、「目的に応じて適切な情報を得て考えたことを紹介する文章を書く」言語活動を設定していた。説明文の学習に、「相手意識」「目的意識」を取り入れたことが素晴らしい。「表現」するためには、「表現内容（本単元では、伝えたい鰹節の秘密）」と「表現技術（本単元では、紹介文の書き方）」が必要であるが、ここに、表現する意図が加わると、生徒の学習意欲を喚起させ、必然性を持たせることにつながり、表現が変わってくる。その意図を生み出すものが「相手意識」「目的意識」である。本時では、「１年生にどう思って欲しいのか」を考えさせることで意図が生まれ、より明確な目的を持った読みや交流ができた。

小学校での説明文の指導が大事！

◆本時（説明文）の指導について

本教材で、筆者の考えが色濃く出ているのは、最後の 17・18 段落である。この部分に書かれた「鰹節を伝承する使命がある。」という言葉を今一度しっかり押さえ、要旨を捉えていれば、１年生を「びっくりさせたい」以外の読みの視点（→文章の要旨に即した、伝承する情報として適切なもの）が出てきたはずである。中学校の説明文の学習は、説明文の読みの技術に裏打ちされた活動でなくてはならず、小学校の３年～５年で説明文の読みの技術をしっかりと身に付けさせておく必要がある。

見方・考え方を働かせる！

◆見方・考え方について

「ことばによる見方・考え方」とは、「対象と言葉」や「言葉と言葉」の関係の意味を自分なりに考えることである。本時では、文章に書かれていることと伝えたい秘密の関係は合っているか（秘密として適しているか）、どのように意味付けたのか（なぜそれを伝えたいのか）を考えることであった。

対象（もの・こと・ひと）―ことば
ことば―ことば

「変容」のある対話に！

◆対話的な学びについて

対話の前と後で、数や質の変容がなくてはならない。また、その変容が可視化できなくてはならない。変容を子供が自覚することが大切であり、教師がその変容を評価し、対話にメリットがあることを知らせるようにしたい。変容をもたらすためには、「伝えたい」や「教えて欲しい」といった必要感を持たせる授業づくりが求められる。

参加者の声

・学習の目的や相手意識を設定することの大切さ、また、魅力的なゴールを設定することなど、改めて、単元を貫く言語活動の必要性や大切さを学んだ。

・説明文を読解するためには、小学３年からの技術を積み重ねていかなければならない。子供たちが読解力を身に付けられるよう、小学校での系統をしっかり捉えて、授業改善に取り組んでいく。

・自己の考えを深めるため、対話的な学びにするためのツールとして「話合いの手順」や「思考ツール」を使ってみたい。

・「対話的な学び」を本当の意味で実現できる（子供たちが変容する、変容を自覚できる）よう、授業を工夫していきたい。

次回は、９月 24 日（火）鏡野中学校で開催します。　　【東部教育事務所】